

編集後記

大学の教員が研究に従事することは、疑問の余地のない自明のことである。だが、一步踏み込んで、では、その研究が「われわれにとってどういう意味を持つのか」と問うならば、その答は（とりわけ人文科学の分野では）必ずしも自明のこととはいえない。

「なぜそれを研究するのか」という設問はあまりに単純・素朴で根源的であるがゆえに表面的にはともかくも、つきつめて考えていくと容易には解答を見出せないし、それだけに研究者にとっては最もやっかいな問題であるといっている。〈みずからの研究の意味を問う〉という作業は、つきつめていくと研究に意味を見出せず、したがって研究者にとっては自己否定につながりかねない危険を含んでいる。そのためかどうかは明らかでないが、研究者相互の間では根源的な意味で〈研究の意味を問う〉という論議は殆んどなされない。「なぜそれを研究するのか」という設問は青臭い書生的発想であり、一人前の研究者が論議する問題ではないという空気が支配的である。しかし、市井の一般人や少年少女などいわば学問的には素人の人々から「なぜそれを研究するのか」と問われた時、その間に対して真摯に答えようとする姿勢を維持することは、学問を職業とする人間にとってはきわめて大切なことであるように思えてならない。たとえその答が容易には得られないものであったとしても、それを求めようとする姿勢を失えば、研究者は単なる銜学者に墮するといえないだろうか。（Y. I.）